TDB Business View
2026/11/24

2027 年正月おせち、平均 2 万 9296 円 半数超が「値上げせず」

前年比 0.7%増、値上げペース大幅鈍化 「値上げ疲れ」価格に反映

2027 年正月シーズン「おせち料理」価格調査

帝国データバンク

本件照会先

飯島 大介（調査担当）
帝国データバンク
東京支社情報統括部
03-5919-9343（直通）
情報統括部：tdb_jyoho@mail.tdb.co.jp

発表日

2026/11/24

当レポートの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。
当レポートはプレスリリース用資料として作成しております。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

SUMMARY

2027 年正月のおせち料理の平均価格は 2 万 9296 円となり、前年からの上昇率は 0.7%にとどまった。前年の 3.8%上昇から値上げペースは大幅に鈍化し、比較可能な 2023 年正月以降で最も小さい上昇率となった。継続して価格を比較できた 106 商品のうち、価格据え置き・値下げは 55 商品と半数を超えたほか、値上げした場合も 1000 円未満に抑えた商品が多かった。

帝国データバンクは、全国の大手コンビニエンスストア・百貨店・スーパー・外食チェーン・日本料理店（料亭）等のうち、価格比較が可能なおせち料理を対象に調査を行った。

比較対象は 110 社（商品）。標準的な三段重、または 3～4 人前サイズの税込価格を基準とした。

［注］2027 年調査は、販売休止などを除く 106 社が対象。商品名・グレードの改廃等で前年との比較ができない商品については、類似グレードの後継品または代替品を採用した

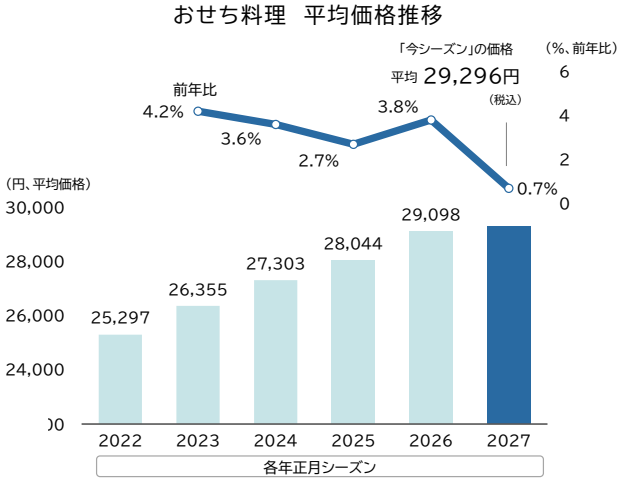
2027 年正月「おせち」 平均価格は 2 万 9296 円

2027 年正月のおせち料理の平均価格は 2 万 9296 円となり、前年からの上昇率は+0.7%にとどまった。前年の+3.8%から大幅に鈍化し、比較可能な 2023 年正月以降で最も小さい上昇率となった。価格が継続して比較可能な 106 社（商品）のうち、価格据え置き・値下げは 55 社と半数を超えたほか、値上げした場合も 1000 円未満に抑えたケースが多かった。長期化する物価高のなか、消費者の「値上げ疲れ」を意識した価格設定が広がった。2022 年正月（2 万 5297 円）からの 5 年間では 3999 円・15.8%の上昇となったものの、「3 万円の壁」は今シーズンも超えなかった。

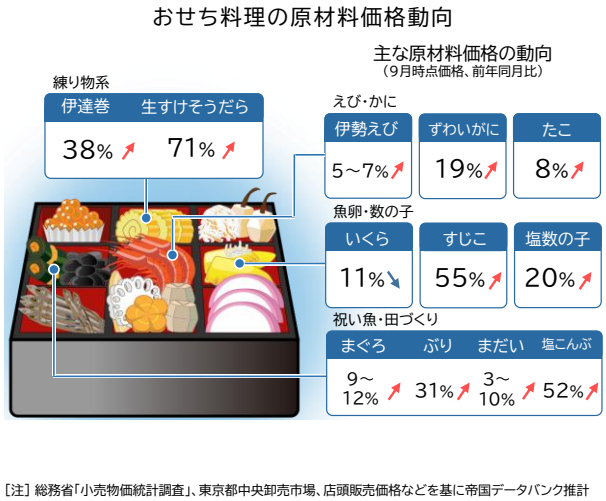
販売休止等を除く調査対象 106 社のうち、約半数にあたる 51 社のおせちが「値上げ」となった。値上げ幅別にみると「1000 円未満」が最も多い 20 社となった。2022 年以降の調査で、値上げ幅のうち「1000 円未満」が最多となるのは初めて。「1000 円台」（13 社）と合わせ、値上げのうち 6 割以上が 2000 円未満となるなど、総じて小幅な値上げにとどめたケースが多かった。前年に 16 社あった「3000 円以上」の大幅値上げも 10 社に減っており、大幅値上げを控える動きがみられた。一方、「価格据え置き・値下げ」は 55 社で、2025 年正月（72 社）に次ぐ 2 番目の多さだった。2027 年正月のおせちは、水産加工品を中心とした原材料価格の高騰や、おせち用の重箱など包装資材の値上がりが続く中でも価格据え置きなどを優先する姿勢が目立った。

大手量販店や百貨店で販売するおせちでは、高価な食材を別の食材に置き換えるなど内容の見直しを行うほか、グレードの集約・整理や材料の早期調達、包材の大量発注などでコスト増を吸収し、売れ筋グレードを中心に価格を据え置くケースが目立った。一方、伊勢えびやあわびなど高級食材を使うホテル・料亭のおせちでは数千円程度の値上げに踏み切る例もみられた。総じて、節約志向に応える 1 万円前後の商品と、最大 10 万円を超える高級おせちの二極化が今シーズンも続いた。

おせち料理の価格推移



［注1］種別・対象に変更が発生した場合は、類似の後継・代替品の価格を採用している
［注2］2027年に販売休止（26年11月時点で販売が確認できないもの）したものが含まれる



［注］総務省「小売物価統計調査」、東京都中央卸売市場、店頭販売価格などを基に帝国データバンク推計

原材料高続く　水産品価格は 2022 年以来の高い伸び

東京都中央卸売市場で取引される水産物の卸売価格（9 月時点、1kg 当たり）は、全品目の中央値で前年比 8.4%上昇した。2023～25 年の 3%前後を大きく上回り、2022 年（21.1%）以来の大きな上昇となった。特に目立つのは練り製品で、伊達巻が前年比 38%、かまぼこが 22%上昇した。原料のすり身は、

海外での需要拡大や円安による輸入コストの上昇で値上がりが続いている。市場で取引される生すけそうだらも前年比 71%上昇した。いくらは前年から下落したものの、秋サケの不漁などを背景に年末に向けて一段の値上がりが見込まれる。実際に、いくらの原料となるすじこは前年比 55%上昇と急騰した。北米からの輸入も多い数の子(塩かずのこ)は、円安や加工地での人件費上昇によるコスト高を受けて値上がりが続き、前年比 20%上昇した。こんぶも海水温の上昇などで記録的な不漁が続き、塩こんぶは前年比 1.5 倍と急騰した。

魚介類以外にも、過去最高水準の高値が続く鶏卵や、高止まりする牛肉などがコストを押し上げている。中東情勢を受けた原油・ナフサ価格の上昇で、プラ製容器や化粧箱などの包装資材等も値上がりしている。

原材料高続くも難しい価格転嫁　平均価格は 3 万円届かず

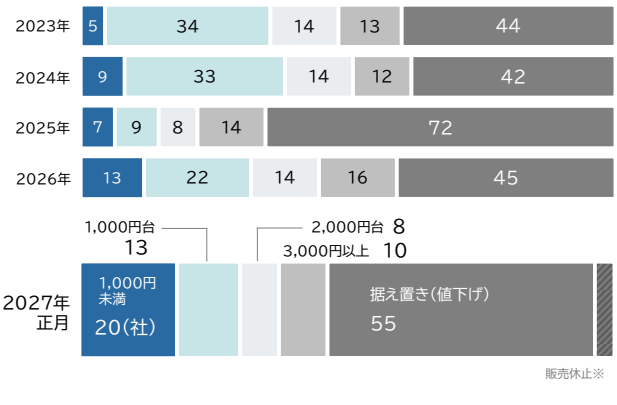
正月を家族や親族と自宅で過ごす傾向は前年に続き根強い。原材料価格の高騰で「手作り」が割高になっていることや、おせち料理が正月の「イベント」として定着していることも、おせち商戦にとって強い追い風となっている。一方で、おせちの価格が上がり続けたことも背景に、1 品 100 円程度から買える「単品おせち」で必要な品だけ買い求める動きも広がっているほか、肉料理などを中心としたオードブルで正月を祝うケースもみられ、おせち以外への流出も起きている。

前年調査時点でも、既に根強い節約志向を背景に高額なおせちを敬遠する傾向が強く、大容量やコストパフォーマンスを打ち出す商品を中心に値上げの余地が乏しくなる可能性が予想された。今シーズンはその見立てどおり、平均価格の上昇率は 0.7%と小幅にとどまり、これまでの値上げペースから大きく鈍化した。ただ、練り物やサケ関連を中心におせち原材料の価格は上昇が続いており、包装資材や物流費の負担も増えている。価格を据え置いた事業者の多くは利益を削って対応しているとみられ、安価な食材への変更や内容量の見直しといった工夫による価格維持の余地は乏しい。

長引く物価高による「値上げ疲れ」がおせち料理の価格上昇を抑えるなか、3 万円を超える価格帯は品質や希少性を打ち出す高級品に限定される可能性があり、平均価格が「3 万円の壁」を超えるハードルは高い。来シーズン以降は、おせちならではの価値と、価格に見合う満足感をどう示すかが、各社のおせち商戦の行方を左右するとみられる。

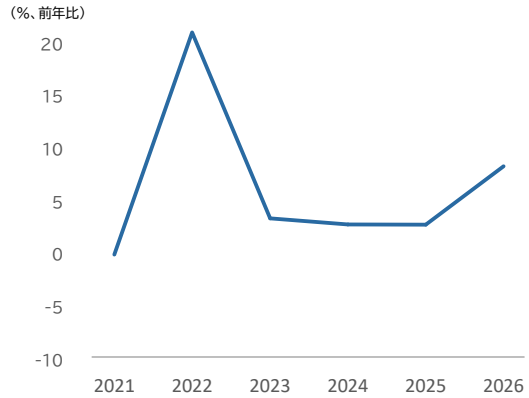
おせち料理の値上げ幅　推移

2023～27 年正月の比較



［注1］種別・対象に変更が発生した場合は、類似の後継・代替品の価格を採用している
［注2］2027年に販売休止(26年11月時点で販売が確認できないもの)したものが含まれる

水産品価格の前年比中央値推移
（各品目価格ベース）



［出典］東京都中央卸売市場、各9月時点